



太平洋戦争中、国民はどんなものを食べていたの



配給された食料や、家庭菜園で栽培した野菜・いもなどを食べていたんだよ。

1941年4月に東京で、米の配給制が始まり、全国に広がっていきました。初めは、11～60才の男子一人につき1日に2合3勺（330グラム）の割合でしたが、しだいに減っていったうえ、配給がおくれがちになりました。1943年からは、十分に精白していない、五分づきから二分づきの黒い米が配給されました。そのため、各家庭では、一升びんに黒い米を入れ、棒でつついて精白することが、毎日の仕事になりました。

米の食べ方をくふうしたり、代用食を食べた

米を食べるときは、おかゆや雑炊にすることが多くなりました。おかゆや雑炊にすると、米がふやけるので量が増え、しばらくの間はおなかがいっぱいになるからです。米の代わりに主食（代用食）として、じゃがいも・さつまいも・小麦・大豆かすなどが配給されることもありました。

家庭菜園をつくり、野菜やいもを栽培した

都市の人々は、自宅の庭や空き地、道路わき、ビルの屋上などを耕して、野菜やいもを栽培しました。野菜の中では、かぼちゃがたくさんつくられました。ご飯の中にかぼちゃをたきこむ家も多かったのですが、しだいに、かぼちゃの間に米つぶが見られる状態になっていったそうです。

戦争の後半には、牛肉・ぶた肉・とり肉はもちろん、野菜・魚などの生鮮食品も、都市の人々には、たいへん手に入れにくくなりました。農村に行くと、着物や家具を食料と交換する人や、野山に行くと、野草・いなご・たにしなどを取ってきて食べる人も、たくさんいました。また、売ってはいけないう物（闇）を取り引きで、食料や物資を手に入れる人々も、たくさんいました。